一般選抜・英語

●英語

【問題】

次の英文を全文、和訳してください。

An extensive amount of research has demonstrated that children who are raised under certain conditions (e.g., poverty, abuse, family dysfunction) are at significantly higher risk for problems in their adult lives (e.g., marital discord, unemployment). This line of research has focused on the identification of risk factors that are predictive of later life dysfunction. Research consistently indicates that poverty is the most powerful risk factor that predicts adult dysfunction. Poverty, or a lack of resources, can result in certain adverse living situations, such as economic dependence, overcrowding, and disorganization within the family system. Another powerful predictor of negative adult outcome is an ineffective or uncaring parenting environment. The importance of warm, caring, consistent parental environments to the development and general well-being of children has been well documented. The occurrence of physical or emotional maltreatment in childhood is a third predictor of negative adult outcomes, particularly the development of adult psychopathology. A fourth factor predicting adult problems is marital discord and/or family dysfunction. Children raised in conditions of chronic family conflict tend to end up in similarly dysfunctional family conditions in adulthood. All four factors (poverty, uncaring parental environments, abuse or maltreatment, and family conflict) have been linked to negative later-life outcomes.

出典：Kenneth W. Merrell, Ruth A. Ervin, and Gretchen A. Gimpel (2006). School Psychology for the 21st Century.　The Guilford Press (New York).　一部改変。

【解答 or 解答例】

これまでの多くの研究により、特定の環境（例えば、貧困、虐待、家庭機能不全など）のもとで育てられた子どもは、成人後の生活において問題（例えば、夫婦間の不和、失業など）を抱えるリスクが著しく高いことが示されている。こうした研究は、将来の生活上の機能不全を予測する危険因子の特定に焦点を当ててきた。研究は一貫して、貧困が成人期の機能不全を最も強く予測する危険因子であることを示している。貧困、すなわち資源の欠如は、経済的依存、過密状態、家庭内の無秩序といった不利な生活環境をもたらしうる。

また、適切に機能していない、あるいは思いやりに欠ける養育環境も、成人期の不適応的な結果を予測する強力な要因である。温かく思いやりがあり、一貫した養育環境が子どもの発達や全般的な幸福にとって重要であることは、これまで十分に示されてきた。さらに、児童期における身体的または情緒的な虐待の経験は、特に成人期の精神病理の形成に関連する第三の予測因子である。第四の要因として、夫婦間の不和や家庭機能不全が挙げられる。慢性的な家庭内葛藤のもとで育った子どもは、成人後にも同様に機能不全的な家庭状況に至る傾向がある。

以上の四つの要因（貧困、無関心な養育環境、虐待、家庭内葛藤）は、いずれもその後の人生における不適応と関連づけられている。

【出題意図】

本問題は、教育学分野における基礎的な英語文献を正確に読解し、日本語として適切に再構成する力を評価することを目的としている。特に以下の点を重視した。

第一に、因果関係や論理構造の把握である。本英文は「危険因子の特定」という一貫したテーマのもと、複数の要因が段階的に提示されている。受験者には、列挙構造や論理の流れを正確に捉えた上で、過不足なく訳出することが求められる。

第二に、専門的語彙の理解と適切な訳語の選択である。risk factor、predict、dysfunction、maltreatment、psychopathology など、教育心理学領域で頻出する用語について、文脈に即した日本語に置き換える力をみる。

第三に、日本語としての表現力である。逐語的な直訳ではなく、学術的文章として自然で明確な日本語に整える力を評価する。

本問題を通して、受験者が英語文献を手がかりに教育学に関連する知見を理解し、自らの研究に活用できる基礎的能力を有しているかを判断することを意図している。

特別選抜（学内）・小論文

●小論文

【問題】

1,000 字以上～1,400 字以内で解答しなさい。

日本では、デジタル教科書を子どもの学習に活用する方針は、ますます強くなってきている。デジタル教科書を活用するメリットについても、多くのサイトや著作で紹介されている。

その一方で、デジタル教科書を子どもの学習に使うことのデメリットについて、正面から議論されたサイトや著作、あるいは研究論文は比較的少ない。

そこで、デジタル教科書を子どもの学習に使うことのデメリットについて、自分で推測や予想をしたうえで、子どもの学習にデジタル教科書をどのように活用していきたいと思うか、自分の考えを述べなさい。また、デジタル教科書を子どもの学習に使いたくないと思う場合は、その理由を具体的に述べなさい。

※学校種、学年、教科などを、指定してもしなくても構わない。

【解答 or 解答例】

→デジタル教科書の導入について、教育現場で活用する学校数や教科数はここ十年間で増加している。小学校においても、授業における教材や複数の子どもの回答例の提示ツールとしてだけでなく、ダブレットを子ども一人に一台ずつ与えて、個に応じた学習に活用している学校も少なくない。しかし、その活用には教員の時間的な省力化など利点がある一方で、子どもの教育にとって効果的な活用にはならない課題もあると思われる。小学校の教科学習から例をあげながら、デジタル教科書だけでは、子どもたちの学習がうまく進まない事例をあげ、どのように活用すべきかについて考察する。

まず、小学生に必要な「自分のペースで学習が継続できるようになる」という視点から考えてみたい。例えば、国語の物語読解を学ぶ場合、紙媒体の教科書であれば、面白い表現、予想できなかった出来事、出来事が起きた理由、疑問に思ったところなど、教員の発問の工夫に沿って、さまざまな「子ども自身の発見」に線を引くことができる。ひいては、自発的に「発見を書き留める」ことが何回も繰り返され、自在に前後のページを繰って移動して、それらを繋げて考えることにつなげることができる。そうした活動を通して、徐々にではあるが自然と「長文を読む」ということに抵抗を感じる子どもが少なくなると予想される。一方、デジタル教科書では、長文になればなるほど、重要箇所の読み飛ばしが起きやすく、発問に対する「子ども自身の発見」に注目することが難しいと感じる子どもが多くなると予想できる。特に低学年では、相続力や理解すること大切にして「自分のペースで読む」という学習の基礎を習慣化させることが重要であり、デジタル教科書では、ページをスクロールさせてしまうと前の画面は視界から消えてしまう。そのた

め「発見すること」が楽しい・面白い活動だと子ども自身が心から感じ「学ぶことの楽しさ」を体感することによって、自発的に学習を継続できる子どもとできない子どもとの差が大きくなりやすいと思われる。

次に、算数について考える。例えば、筆算や図形の問題などでは、途中の過程で思い思いに紙媒体に「自分の手で書く」ことが、自発的に考えることを促すことに密接に関係すると考えられる。一方、デジタル教科書やタブレットでは、ペン入力などの操作がしやすくなったとはいえ、保存や消去等の操作を多々実行しなければならず、「手書き」に比べて「思考の自在さ」についても、子どもの間で格差が生じる可能性は十分に考えられる。その結果、「なぜそうなるのかを考える」という大切な論理的思考力を十分に伸ばすことができない子どもを取り残してしまう懸念が残る。

以上のことから、小学校段階においてはデジタル教科書を「デジタルのよさを活かした、補助的活用」にとどめる方がいいと考える。例えば、社会科の地図・資料の拡大表示、理科の顕微鏡画像を拡大等、視覚的な教材が学習にとって必要不可欠な場面では学習効果が上がることが期待できる。一方で、国語の読解や算数の思考過程を重視する学習では「子ども自身が書き込める」紙媒体の教科書やノートを中心にした方がいいのではないか。

小学校段階では、デジタルと紙媒体のそれぞれのよさを活かしたバランスの取れた活用が求められる。子どもにとって効果的な学習環境についてさらに深く考えていきたい。

【出題意図】

→デジタルと紙媒体の教科書について、入力や保存や画面の共有が簡単になるなどのよさがある一方で、「考える力」という子どもの学びにとって最も重要なことについて、どれほどの効果があるのについて、両方を対比して具体的に想像できるのか、ひいては、教育という行為の価値とは何かについてどう考えているのか等について知る。

社会人選抜・小論文

●小論文

【問題】

1,000～1,400 字で解答してください。

現在、日本の学校ではいわゆる「外国にルーツのある子ども」の数が増えている。あなたが、日本の学校の教員になったときに、こうした「外国にルーツのある子ども」がいるクラスの担任等になったときに、どんな考えに基づいて、何を大切にかかわっていきたいと思うか。なるべく具体的に自分の考えを述べなさい。

※具体的な校種や教科を、指定してもしなくても構わない。

【解答 or 解答例】

現在、日本においても、どの学校種でも「外国にルーツのある子ども」が増加している。文化や言葉の違い、積み上げてきた学習の違いといった「多様性」に対応するためには、そうした子どもも共に学ぶ際の内容や方法について、教える側が実践から考えることが重要である。そのために、まず重視したいのは「学ぶことの楽しさを子どもが心から感じることを大切にする」ことである。 そのためには、ルーツの違い、学習の積み上げの違いによって、同じ教室にいて別々なプリント学習をするだけでなく、授業の同じテーマを理解し、どこが問題なのかを自らの力で感じ共同で考え学ぶという一連のプロセスに参加するという「集団の中で一人ひとりが学ぶ」ための内容や方法について、試行錯誤しながら実行・改善することである。

「集団で学ぶ」ことにとって、まず重要になるのは「教員やと子ども」及び「子ども同士」で「対話がストレスなくできること」をどう実現するかだ。授業に登場する日本語をキーワード化し、カードを使って黒板等に貼る、写真や絵などの視覚的教材を活用したり、ICT による翻訳支援などを積極的に組み合わせたりして、授業内容について「わかること」を増やしていくことがまず必要だと考える。また、それだけでなく「わかないことはわからない」と言える学級の寛容的な雰囲気をつくることも大切だと考える。

さらに、日本語による自分の考えや意見を表明することに難しさを感じる子どもがいる場合、その子どもの「意見を言う」ひいては「学ぼうとする意欲」は減退していくのは明らかである。そのため、教員と子どもの対話のキャッチボールを主流とするのではなく、ペアやグループに分けたり、話の要点を模造紙などに言葉だけでなく絵や記号を使いながら記録をとる工夫をしたりして、ペアの相手やグループの一部を入れ替えて模造紙の記録を見せながら今までの話し合いを土台に対話を続けられるようにするなど、誰もがどのペアやグループになっても話題となっている内容に自分の考えや意見をぶつけることができるよう

な学びの方法を工夫したい。気分を変えて、日本語がうまく使えない子どもの母国語を調べて、それをキーワードにしたジェスチャーを用いた説明、クイズなど、お互いがお互いを受け入れているということが感じられる方法を積極的に授業に取り入れることも、効果的だと思う。子どもが安心して参加できる環境を整い、共に学び合う関係が生まれるからである。

以上のように、始めは「学習の壁」と感じていた「多様性」が「多様だからこそ、今まで知らないこと、自分とは違う見方考え方を知ることによって、学びが広く深くなる」、あるいはむしろ「学びを広く深くするには、多様性は必要である」と捉えたい。

「学級だより」等で、外国にルーツのある子ども学びの主人公になって、ほかの仲間の子どもが今まで知らなかった世界について学んでいるといういることを紹介することも、そうした外国にルールのある子どもの保護者にとっても、自分の子どもに対する新たな気づき、さらには担当教員との「対話」のきっかけにつながり安心材料になり得る。

教員として「違い」を恐れるのではなく、お互いの「違い」を知ることが「学ぶ楽しさ」につながる授業を目指したい。それこそが、多様化する社会における学校教育の役割だと考えるからである。

【出題意図】

どんな教育観を持っているかを知るために、「多様性」というさまざまなメディアで飛び交っている言葉について、学校教育とどのようにつながっているのか、繋げていけばいいのかについて、どういう考えを持っているのかを知る。